- タイトル -

THE LAST WITCH

(読み：ザ・ラストウィッチ)

- イントロダクション -

『令和の日本には魔法使いが存在する。』
そんな嘘みたいな真実と、そして自身も魔法使いであることを31歳で知った主人公の"一ノ瀬青李(いちのせ　あおい)"。

素性を隠し現代の日本に静かに暮らす魔法使いたち、その暮らしを陰から支える組織**『魔法委員局(まほういいんきょく)』**。
一年前の恋人の失踪に魔法使いが関わっていることを知った主人公は、恋人を探すために魔法委員局に協力するようになる。
その一方で魔法使いの存在を世に明らかにしていこうとする敵対組織**『Kervilles(カーヴィルス)』**が密かに動き始めていた。

――ある日、Kervillesの手によってこの世界に魔法使いが存在することが大きく知れ渡り、常識が一変する。――

誰もが知っている ＃魔法 ＃魔法使い ＃魔女 という言葉。
一度現実味を帯びたその"言葉"が令和の日本に大きな影響を及ぼしていく。未知の力を持つ魔法使いたちは、この世界に存在してもいいのか。

これは異能力バトルでも、ただの考察系ドラマでもない。魔法使いたちの陰謀が渦巻く新たなリアルファンタジードラマ。

- コンセプト -

大人も子供も、本気で魔法使いを信じる3ヶ月。

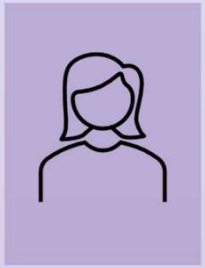
『多様性という言葉の内側に、魔法使いが存在することは許されますか？』

Character 人物相関図

魔法委員局
調査部第五班

翔子探しを協力
魔法委員局の仕事を協力

みやした　ゆら
宮下 優来 (21)

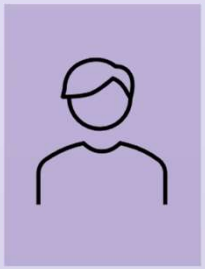


魔法委員局調査部第五班班長。現役大学生で真面目な性格。少し独特な話し方なので周りから“変わっている”と思われることも。

敵視

綾川高校

いちのせ　あおい
一ノ瀬 青李 (31)



綾川高校2年1組担任。担当は国語。恋人・翔子の失踪をきっかけに故郷の母校へ転勤。生徒たちから友達のように親しまれている。

担任/魔法を教える
教え子/家族ぐるみの付き合い

よだ　れんたろう
余田 錬太郎 (17)

綾川高校2年1組在学。両親とも魔法使いだが、錬太郎が幼い頃に離婚しており、現在は母と二人暮らし。若干反抗期気味。

恋人

元教え子
元担任

担任
教え子

仲のいい友達

Kervilles

元部下
元上司

あきの　なぎさ
秋野 凪沙 (29)

元魔法委員局調査部班長。委員局内での揉め事があり、退局。魔法委員局に不満を持っている。

まつおか　しょうこ
松岡 翔子 (31)

元綾川高校教師。半年前に突然姿を消す。青李とは高校と大学の同級生。慈愛に満ちた人物。

元教え子 ？
？ 元担任

やまもと　ある
山本 在 (17)

綾川高校2年1組在学。錬太郎の友人。本人も知らない、ある秘密を抱える。

ある理由で警戒・追っている

徐々に魔法と魔法使いの存在に気づいていく

警視庁捜査一課
捜査支援係西東京分室

まさき　けい
正木 圭 (33)

刑事

ながた　えいきち
永田 永吉 (29)

正木の部下
バディ

【全体構成】

第一話 「My First Witch － 遭遇 －」

高校の国語教師の一ノ瀬青李は、恋人・松岡翔子が失踪したことをきっかけに都心の高校から故郷の田舎・綾川町の母校に転任した。それから初めての夏を迎えたある日、自身を魔法使いだという女性・宮下優来が青李の前に現れる。突然の状況に理解が追いつかない青李。そしてあろうことか彼女は青李自身のことも『魔法使い』だと告げた。

事の発端は青李が勤める高校近くのコンビニで起きた万引き事件。魔法使いの手によって引き起こされたというその事件の容疑者が、青李の教え子の余田錬太郎だった。優来は『魔法委員局』という魔法使い絡みの事案の調査を行う組織の一員だと名乗り、錬太郎を取り調べる。一方で本人は否定、錬太郎と親しい青李もどこか犯人が彼だとは思えなかった。放課後、錬太郎は犯人を連れてくると優来と青李を小学校に案内する。犯人は幼い小学生だった。空腹に苦しんだその子は自身が魔法使いだと知らないにもかかわらず、無意識に魔法が使えるようになってしまっていたのだ。無事、無実を証明することができた錬太郎。その夜、最近綾川町で噂になっている黒い大型犬に遭遇する。

その犬は夜道を歩く人や走る車の前に突然飛び出し、追いかけると一瞬で姿を消すため、魔女伝説の残る綾川町では「魔女の飼い犬ではないか」と、少し前から噂されていた。その正体は黒い小さな紙切れの集合体で、自由自在に形作られることで犬に見せていたのだ。これが魔法使いの仕業だったとわかった錬太郎と青李は現場近くに犯人を見つけ、追いかける。優来も合流し、いよいよ犯人を追い詰めた時、犯人が「自分は 11 人目の魔女を探しに来た」と告げる。

その言葉に青李はハッとした。翔子が失踪したあと、青李の元に送られてきた一冊の文庫本と翔子の日記、その日記の片隅にも同じ「11 人目の魔女」と書かれていたのだ。

第二話 「Wizard called star － スターと呼ばれる彼は －」

翔子の失踪に魔法使いが関わっていると考えた青李は、その真相を知るために錬太郎と一緒に魔法委員局の協力員として優来と共に活動を始める。錬太郎はその魔法使いとしての能力の高さから優来に魔法委員局に誘われており、魔法の使えない青李も保護者としてそれに便乗した。――早速、魔法委員局に通報が入る。

今回の通報者は俳優の相原大智（あいはらだいち・男）。内容は彼の共演者である俳優の二村三波（ふたむらみなみ・男）が駅のホームから突き落とされた、というものであった。お互いが魔法使いであることを知っていた大智と三波。なんとか最悪の事態を避けることができた三波と彼の見舞いに来た大智は、犯人はおそらく魔法使いでその人物に心当たりがあると話す。話を聞いて青李たちが防犯カメラを確認すると、三波の背後には誰もいないにもかかわらず、確かに誰かに押されたようにも見えた。

事件前、大智と三波が魔法使い同士のコミュニティで食事をしている時、一人の男が「魔法使いは公に認められて、魔法を自由に使えるべきだ」と強く言い放った。今まで“隠れて潜むべき“だというのが魔法使い達の基本ルール、ましてや芸能人として活動する三波や大智にとって、そのルールは“必須“だった。ただの考え方の違いだったが、お酒も入っていたからかヒートアップしてしまい、最終的には口論のようになっていたらしい。口論の中で、男は自分と同じ考えをしている魔法使いは他にもいて、新しい常識を作るためにすでに行動しているとも話していたという。三波がホームから突き落とされたのはそれから数日後のことだった。青李は犯人の調査を進める一方で、実は同郷で同級生の大智に突然姿を消した翔子について話を聞く。そこで大智は、翔子が失踪する直前に二人で会った時、自分を追っている人物がいることを話していたと青李に伝える。

第三話 「Magic for whom － 誰が為の －」

ホームでの事故による怪我で入院中の三波から“傷跡を残さずにどんな病気や怪我でも治せる元外科医の魔法使い”の話を聞いて調査を始める青李や優来たち。その人物は缶詰一つから億単位の大金まで、言い値であらゆる手術を行っているという。噂話や聞き込み調査から、青李たちはその正体であるホームレスの水森雅也（みずもりまさや・男）にたどり着く。もちろんこれは違法行為、ただ水森が救ってきた患者の数は計り知れなかった。水森の行動は正義なのだろうか、それとも悪なのだろうか。

そんな中、青李は優来の兄・悠己（はるき）から妻・梨沙子（りさこ）（優来の義理の姉）に手の施しようのない病気が見つかったことを打ち明けられた。水森の調査中、青李はこのことをぽろっと優来に告げてしまう。ブラック企業で精神と身体を病んだ兄を懸命に支えた梨沙子は悠己にとっても優来にとってもかけてはいけない存在だった。水森なら、梨沙子のことを助けられるかもしれない。一方で、魔法委員局の大義は“魔法使いが他の人との生活に溶け込めるようにする”こと、そして“魔法使いが困ったら魔法使い同士で助け合い、もし危険なことしようとしていたら魔法使いの間だけでそれを解決する“こと。この大義からすると水森の行為は魔法委員局にとって大きなリスクだった。水森は自身の行為を見逃してくれたら、梨沙子を助けると優来に取引を仕掛ける。――優来が出した決断は、水森を見逃し、梨沙子の手術は依頼しないというものだった。

自分の家族に命の危険が迫り、藁にも縋る思いで水森や魔法という普通なら存在するかどうかもわからない物を信じて依頼する人の気持ちを身にしみて感じた優来。だが、魔法や魔法使いが夢や幻のような存在ではなく、優来にとってはただの一つの現実だからこそ、魔法使いではない梨沙子の手術を魔法使いに頼むことはできなかったのだ。

第四話 「The wizard who was there － その時、そこに居た －」

青李の勤める綾川高校は夏休みに突入した。家族ぐるみの付き合いがある錬太郎の母の頼みで錬太郎とその友人・山本在の夏期講習を自身の家で引き受けることになる。そんなある日、半年前に発生した「青梅山荘集団自殺事件」が翔子の失踪に関係しているのではないかと錬太郎が青李に伝える。その事件が発生したのは錬太郎が高校一年生だった時、担任は翔子だった。夏休みの直前に報道が出た青梅山荘集団自殺事件、その翌日、翔子は学校を休んでいたと錬太郎は言う。すぐに復帰した翔子だったが様子が少しおかしかったことがずっと気になっていた。そして、錬太郎の周りで同時期に突然連絡が取れなくなった人物がもう一人いた。その人物は錬太郎よりもかなり年上のゲーム仲間の男性で、オフ会で知り合った時に錬太郎が綾川町の出身だと聞いた彼が、探り探り会話する中でお互いが魔法使いだと分かり仲良くなった。その男が青梅山荘集団自殺事件で亡くなっていることを、最近錬太郎が他のゲーム仲間から聞いたという。そして以前、その男は「魔法委員局を抜けたある魔法使いを調べている」と錬太郎に話していたのだ。錬太郎が、どこか魔法委員局のことを信用しきれていない理由の一つがこれだった。

話を聞いて優来・青李・錬太郎は青梅山荘集団自殺事件の現場を訪れる。そして、錬太郎はこの事件と魔法委員局の関係を優来に問い詰める。すると優来は以前魔法委員局に在籍していた秋野凪沙という人物について話し始めた。秋野凪沙は魔法委員局調査部の、今は解散した第四班の班長だった。そして、入局当初の優来は凪沙の班に配属されていたのだ。凪沙が退局した原因は上層部との意見の食い違いだと話す優来。凪沙は委員局内で力を持つようになり始めたタイミングで“魔法使いが目立たないようにする”と言う根本を批判するようになったらしい。――秋野凪沙の情報をきっかけに、青李は三波の事件と青梅山荘集団自殺事件が一つの思想で繋がっていることに気づく。

「 THE LAST WITCH 」　1話　谷戸灯夜

【登場人物表】

一ノ瀬青李（３１）　高校の国語教師

余田錬太郎（１７）　青李の教え子

宮下優来（２１）　魔法委員局局員

松岡翔子（３０）　青李の恋人

大野（２８）　青李の同僚・化学教師

宇田川謙信（２０）　優来の後輩

一ノ瀬幹男（９３）　青李の祖父

一ノ瀬夏美（５４）　青李の母

一ノ瀬直哉（５５）　青李の父

余田朱里（４３）　錬太郎の母

美希（１７）　青李の教え子

ゆき（８）　美希の妹

健（８）　ゆきのクラスメイト

正木圭（３３）　刑事

永田永吉（２９）　刑事

教頭（５７）　綾川高校・教頭

コンビニ店主（５０）　ユーストア東綾川店

マスター（４３）　喫茶ハンモック

小林（２９）　翔洋塾・塾講師

○綾川高校・体育館（夕）

バスケットボールをドリブルする音が響く体育館。

一ノ瀬青李（３１）、スリーポイントライン上でバスケットボールをつく。

青李「……本当にこんなんでいいのかよ」

ゴールに向かってボールを構える青李。

青李が見ているゴールの下で胡坐をかいて座る制服姿の余田錬太郎（１７）。

錬太郎「近い……、もっと奥」

青李「え？」

ゴールから遠ざかる青李。

錬太郎「もっと」

さらにゴールから遠ざかっていく青李。

錬太郎「もっと、もっと、もっと」

青李、反対側のゴール位置まで下がる。

青李「無理だって」

錬太郎「バスケの練習じゃないんだから」

錬太郎、青李を挑発するように首を傾げ、口角を上げる。

青李「『魔法』……か」

力むようにギュッと口を結ぶ青李。

青李、再びゴールに向かってボールを構え、投げる。

○（回想）綾川沿い・三珠橋の上（夜）

川に架かる橋の中央、浴衣姿の松岡翔子（３０）と並んで立つ甚平姿の青李。

翔子、下流側で打ちあがる花火を見ながらつぶやく。その目には涙。

翔子「やだなぁ、まだ生徒達に教えなきゃいけないこと沢山……」

涙ぐんでいる翔子を見て少し驚く青李。

○綾川高校・校舎入口前（朝）

入口に立ち、生徒達に挨拶をする青李。

静かに青李の後ろに立つ大野（２８）。

大野「一ノ瀬先生聞きました？」

青李「びっっくりしたぁ、大野先生か」

大野「最近、夜道にめっちゃデカくて、真っ

黒な犬が出没するって話」

青李「それ、ウチの父親が昨日の夜、運転中に遭遇してました。周りに車がいなかったから大事故にはならなかったんですけど」

大野「え？そうだったんですか！？……いやこの町、魔女伝説あるじゃないですか。だから生徒たちが、（小声で）魔女が飼ってる犬なんじゃないかって」

青李「ここのは病気を治したとか、雨を降らせたとか……良い魔女の話ですよ」

大野「ちなみに信じてるんですか？魔女とか魔法使いとか、魔法とか」

○ユーストア東綾川店・店内（朝）

店内を物色している錬太郎、目の端に映ったある光景に驚く。

青李の声「う～ん……」

辺りを見回し、慌てて外に出る錬太郎。

○綾川高校・校舎入口前（朝）

入口前で並んで立つ、青李と大野。

少し考える青李。

青李「『居ても良い』…とは思います。この町にいると昔から話だけはよく聞くんで」

大野「そっか。一ノ瀬先生、地元ですもんね」

何かを思い出す大野。

大野「あれ？ってことは翔子先生ともここに通ってる時から？お二人ともこの高校出身ですよね？」

青李「あぁ、いや。付き合ったのは大学から」

青李の顔を伺う大野。

大野「…まだ連絡取れないんですか？」

頷く青李。

青李「去年の花火大会の次の日から。全く」

大野「それ何かの事件に巻き込まれてる可能性とかないんですか？」

青李「少し経ってから俺の実家に荷物が送られてきて、筆跡も指紋も翔子のもの。それに住んでたアパートも綺麗になってて。…警察はただの喧嘩だって思ってるみたい

だし、俺もなんかしちゃったのかなぁって」

大野「でも諦めきれずに里帰り……」

青李「荷物が届いたのが俺の住んでたアパートじゃなくて実家だったってのもなんか引っかかってて。そもそも綾川町に戻るって言い出したのも急だったし、ここにいたら何かわかるのかもって……思ってはいます」

大野「こちらとしては急に空いた国語教員の枠に一ノ瀬先生がきてくれて助かりましたけどね。ってかその送られてきた荷物って」

教頭（57）が青李の元に駆けつける。

教頭「一ノ瀬先生！」

青李が教頭の方を振り返る。

教頭「先生のクラスの余田君が、（小声で）万引きを……」

○同・廊下（朝）

登校してくる生徒たちに目立たぬよう、端で話をする青李と教頭。

青李「錬が万引きって、何かの間違いじゃな

いですか？」

教頭「間違いでもなんでも、その万引き現場に居合わせた人が余田君連れて学校まで乗り込んできちゃってるんですよ」

青李「居合わせた人？」

教頭「とにかく、相手を刺激しないように。余田君は一ノ瀬先生がいないと喋らないって言ってるみたいだし、」

面倒くさそうに眉間に皺を寄せる青李。

青李「えぇ、なんで俺……教頭先生でも」

教頭「先生余田君と仲良いでしょ。一階の会議室にいるので、対応お願いします」

○同・一階廊下・会議室前（朝）

扉に手をかけ、大きく息を吐く青李。

ノックをして扉を開く青李。

○同・一階会議室・中（朝）

青李が扉を開くと、大きな机を挟んで錬太郎と宮下優来（２１）が向かい合

って座っている。二人が、パッと青李の方を見る。

青李「お待たせしました、錬太郎の担任の一ノ瀬です。本当にご迷惑をおかけしました」

青李が優来に頭を下げる。

じっと青李を見る優来。

優来「座ってください」

青李が頭を上げ錬太郎の隣に座る。

優来「突然お呼び立てしてしまい申し訳ございません」

優来の丁寧な態度に少し安心する青李。

優来がスッと名刺を青李に差し出す。

安堵の表情の青李。優来の名刺を見て一転、表情を曇らせる。

顔を上げ、優来を見る青李。

優来「私、『魔法委員局調査部第五班、カッコ仮』班長の宮下優来と申します。本日はユーストア東綾川店で発生した万引き事件の調査中に、（錬太郎を手で指して）こちらの余田錬太郎君が怪しい動きをしたので、

お話を伺おうと思ったのですが、彼が、
（青李を手で指して）先生がいないと話さないとおっしゃるので図々しくも学校にお邪魔させていただきました」
優来に圧倒され、唖然とする青李。
優来「お手数ですが立会をお願いしてもよろしいでしょうか？……先生も『魔法使い』だとお聞きしたので」
優来の言葉が理解できない青李。
青李「……は？」
優来「え？」
青李「何ですか、……魔法使い？」
名刺を再び見る青李。
青李「……宮下さんが？」
優来「はい」
青李「……僕も？」
優来「そうなんですよね？」
青李「僕も！？」
優来「先生も」
青李「魔法使い……」

優来「そうお聞きしたんですけど」

目を点にする青李。

青李「……え！？」

○#1タイトル「My First Witch ――遭遇――」

○綾川高校・一階会議室・中（朝）

驚いている表情の青李。

青李「そうお聞きしたって、誰に……？」

優来が錬太郎を見る。

青李、錬太郎を見てつぶやく。

青李「お前何言ってんの……？」

錬太郎「嘘じゃないもん」

キョトンとした表情の優来。

優来「ちょっと待ってください！」

優来が錬太郎を見る。

優来「この人魔法使いじゃないんですか？」

青李、錬太郎、同時に。

青李「違いますよ！」

錬太郎「そうだよ」

唖然とする優来。

優来「……一旦整理していいですか？」

×　×　×

話をしている青李と錬太郎と優来。

優来「つまり、錬太郎君は先生が魔法使いであることも、先生自身が自分を魔法使いだと知らないことも知っていて、呼び出した」

都合が悪そうにうつむく錬太郎。

優来「どうしてまた話を面倒に……」

錬太郎「親に局の人間には気をつけろって言われてんだよ」

腹を括ったようにふっと息を吐く青李。

青李「あの、先に万引きの話聞いてもいいですか？ちょっと、魔法使いとかは、一旦今受け付けられないんで」

優来「……そうですね」

〇（回想）ユーストア東綾川店・事務室（朝）

パソコンで防犯カメラの映像をチェックする優来とコンビニ店主（５０）。

優来の声「東綾川駅前のコンビニの店主さんから、魔法委員局宛に通報があったんです。……商品が消えるところを見たと」

防犯カメラは入り口の近く、レジ前の新商品棚を写している。防犯カメラ内の映像、突然棚に並べられた菓子パンが一つ消える。

優来の声「時間は朝から夕方ごろまでと、まちまち。でも消えるのは必ずレジ前の新商品棚から」

〇（回想）ユーストア東綾川店・店内（朝）

レジ周りをチェックする優来。

ふと、店の外を見ると、そこに商品を手にもった錬太郎の姿。

優来の声「色々調べたあと店に出たら、たまたまレジを通していない商品を手に持った錬太郎君に出くわしたというわけです」

〇元の綾川高校・1階会議室（朝）

話をする青李、優来、錬太郎。

錬太郎「やってないから！」

話しながらヒートアップしていく優来。

優来「どう見ても現行犯ですけど……、やってないならやってないで、説明してくれたらいいのに、あの場では『ここでは話さない』の一点張りで、気づいたらここまできてしまいましたすいません」

錬太郎「そのピンバッチ見て話す気失せた」

ため息を吐く優来。

青李が優来の襟元に付けられた黒猫モチーフのピンバッチを見る。

錬太郎「証人なしで話してたまるか」

頑固な錬太郎に何かを察する青李。

青李「じゃあ俺も聞くから、とりあえず話せ」

錬太郎が青李を見る。

○同・職員室（朝）

自分のデスクに向かう青李と、その後を追う教頭。

教頭「なかなか戻ってこないので心配しましたよ。穏便に済んだんですよね？」

青李「……まぁ一応」

青李が自分のデスクに置いてある教科書等の授業セットを手に取る。

教頭、不安げに青李に話しかける。

教頭「余田君とは家族同士の付き合いでしたっけ？……それに去年翔子先生のクラスだったし、親しいからってつけ込まれたりしてないでしょうね？」

青李、柔らかい表情で、冷静に。

青李「家のことも翔子のことも、今関係ないですよね？……じゃあ授業なので」

教頭を置いて、立ち去る青李。

○同・職員室・外

後ろ手で扉を閉める青李。

緊張から解放され、大きく息を吐く。

青李（M）「いやいやいやいや……なんだよ」

○同・廊下

生徒たちに挨拶をしながら歩く青李。

青李（M）「錬が魔法使い……ってか俺も？」

○同・職員室

机に肘をつき、頭を抱える青李。

青李「でも冗談には見えなかったんだよなぁ」

大野が青李に声をかける。

大野「一ノ瀬先生」

驚く青李。

青李「うわぁ！びっくりしたぁ」

大野「どうしたんすか、頭抱えて」

青李「いや！……なんでもない」

○同・国語科資料室

本などの物で溢れた小さな資料室。

椅子を出し、錬太郎を座らせる青李。

青李「朝のあれはなんだ？」

錬太郎「俺万引きなんてやってないからね」

青李「あぁ、そっか。そっちがメインだ」

青李、錬太郎に歩みより肩を叩く。

青李「そうだよ、お前はやってない、俺も信じる。……それは一旦置いといて」

錬太郎、じっと青李を見ている。

青李「魔法使い……俺が？」

錬太郎「なんだその話か」

青李、錬太郎の前の椅子に座る。

青李「そもそもなぜお前が、俺が魔法使いだってことを知ってる？もし仮にそんなことがあったとしたらの話だけど」

錬太郎「青李君のじいちゃんに聞いた」

青李「じいちゃん？」

錬太郎「青李君のじいちゃん魔法使いだよ」

○一ノ瀬家・縁側

縁側でお茶を啜る一ノ瀬幹男（９３）。

青李の声「じいちゃん魔法使いなの！？」

○綾川高校・国語科資料室

椅子に座る青李、驚いた表情。

その向かいに座っている錬太郎。

錬太郎「もうボケちゃってあんまり使えないだろうけど」

真剣に話す錬太郎の姿に、ため息をつく青李。

青李「それいつ聞いたの？」

錬太郎「青李君が一人暮らししてた時」

青李「え～……」

○喫茶ハンモック・店内

レトロな雰囲気の店内。

テーブル席に座っている青李。

青李、周りに聞こえないように小声で。

青李「って、錬太郎に言われたんですけど。有り得ます？こんな話」

青李の向かいに座っている優来。

優来「気を使わなくても、このお店魔法使いオンリーですよ」

青李が店内を見回す。

店内に他の客はいなく、カウンター越

しにマスター（４３）が一人立つ。

マスターが青李に会釈する。

優来「マスターも魔法使いです」

青李「はぁ」

優来「いいですよね、この町は魔法使いが多いからこういうお店があって」

青李「……はぁ」

優来「その話自体は信じてもいいと思います」

青李「でも父さんと母さんは魔法使いじゃないっていうんですよ。錬太郎が、ですけど」

頷く優来、ペーパーナフキンを取り出し、何かを書き始める。

優来「例えば、お父さんとお母さんの両方が『魔法使い』と『魔法使いではない人』の子供だった場合、」

優来は家系図を書いている。

優来「２５％の確率で、先生のように魔法使いでは無い両親から魔法使いが生まれます。中学校でやりませんでした？劣性遺伝、メンデルの法則。魔法使いもそれに則って遺

伝することがわかってるんです」

青李「……シワシワのえんどう豆のやつ？」

優来、青李を手で指して。

優来「シワシワのえんどう豆です」

青李、少し嫌そうに。

青李「えぇ」

優来「私は違いますが、見ただけで魔法使いかどうかわかる人が稀にいるのは確かです。おじいさんはそうなのかもしれません。もし本当に気になるなら血液検査できますよ」

青李「……そういう感じなんですか？」

優来「あ、少しお金がかかります」

青李「ちなみにいくらですか？」

優来「２万５千円です」

青李「まあまあするな」

優来「うち慈善事業じゃないんで。……まぁ興味あれば連絡ください。検査キットお送りします。……というか先生、授業大丈夫なんですか？こんな時間に」

青李「大丈夫です。……それに朝からこのこ

とばっかり気になっちゃって。あと錬太郎から伝言」

スマホの画面を見せる青李。

青李「朝話した万引き事件の犯人、連れてくるからここにきて欲しいと」

青李のスマホ画面を覗く優来。

○綾川小学校・正門近く

小学生が次々に出てくる。

正門前に立つ美希（17）と青李。

美希の元にゆき（8）が駆け寄る。

ゆき「おねえちゃ～ん」

ゆき、青李の背後の錬太郎に怯える。

美希「大丈夫、お姉ちゃんの友達」

錬太郎「あ、あいつだ！」

美希「どの子？」

校舎から出てくる健（8）の姿が見える。

錬太郎「あの、黄色の服の、短パンの」

美希、ゆきに尋ねる。

美希「ゆき、あの子ちょっと呼んで」

ゆき「たけるくーん！」

健、ゆきの元に駆け寄る。

健、青李の背後に見えた錬太郎にギョッとして逃げようとする。

青李「あ、ちょっと待って」

錬太郎「待って！」

振り返る健。

錬太郎、健に目線を合わせる。

錬太郎「大丈夫、俺怒ってないし」

じっと錬太郎を見る健。

首を傾げ、優しく健に尋ねる錬太郎。

錬太郎「お前だって、今怖いんじゃないの？」

少し離れたところで錬太郎たちの様子を見る優来。

○喫茶ハンモック（夕）

テーブル席でオムライスを食べる健。

その横で話をする青李と優来と錬太郎。

錬太郎「最近あの店の前によく居たんだよ」

○（回想）ユーストア東綾川店・店前（朝）

店の外から店内をじっと見ている健。

錬太郎の声「多分腹へってんだろーなーって思ってて……そしたら今日」

○（回想）同・店内（朝）

店内を歩いている錬太郎。

突然レジ前の棚から菓子パンが一つ消え、慌てて店の外に出る錬太郎。

○（回想）同・店前（朝）

店の外には健の姿。

ジリジリと近づく錬太郎に怖がりながら後退りする健。

目線を合わせるようにしゃがむ錬太郎、目線を健の手提げカバンに移す。

錬太郎「これ中見てもいい？」

一瞬躊躇う健。

錬太郎が手提げカバンを開き、中を見ると店内で消えた商品が入っている。

健「知らない！」

健はどこか怯えた表情。

優来と店主がバックヤードから店内に出てきたことに気づく健、商品を錬太郎に押し付けて走り去る。

○元の喫茶ハンモック・店内（夕）

優来と青李に説明する錬太郎。

錬太郎「本人、自分が魔法使いって知らないみたいだし、多分無意識に。ちゃんと飯食えてないんじゃない？」

優来「……この子のことは魔法委員局から警察と児童相談所に相談してみます」

青李「警察とかって、こういうの取り合ってくれるんですね」

優来「本当に限られた人ですが……その前に」

優来が健を見る。

優来「一緒に謝りに行きましょう。あの店主さんはわかってくれる方です」

頷く健。

錬太郎「あのおじさん魔法使いなんだ」

優来「店主の奥さんが。それで警察より前に私たちに通報していただけて」

ふぅん、と頷きカバンを担ぐ錬太郎。

青李「帰んの？」

錬太郎「母さんに塾の体験授業申し込まれた」

錬太郎、ポンポンと健の頭を撫で、

錬太郎「じゃあなー」

立ち去る錬太郎を呼び止める優来。

優来「あの！」

振り返る錬太郎。

優来「疑ってしまいすみません。ご協力ありがとうございました。本当に助かりました」

頭を下げる優来。

少し照れる錬太郎。そのまま店を出る。

〇一ノ瀬家・居間（夜）

青李が来る。

青李「ただいま～」

首にコルセットをしている一ノ瀬直哉

（５５）が夕飯を食べている。

直哉「おぅ、おかえり」

青李「大丈夫？」

直哉「まぁな。しばらくコレつけろって言われたけど」

台所から一ノ瀬夏美（５４）が来る。

夏美「青李ごはんは？」

青李「後で食べる」

夏美、階段で２階に上がろうとしている青李を呼び止める。

夏美「あ！青李！」

振り返る青李。

夏美「お風呂の電球切れちゃったから後で買ってきて」

青李「え～」

夏美「商店街の電気屋さん、まだ開いてるでしょ。お父さんあんなんだし、私も」

夏美の片手にはビールの缶。

青李「分かったよ」

〇翔陽塾・教室Ａ（夜）

小林（２９）が数学の授業をしている。

扉が開き、錬太郎が入る。

緊張感が漂う教室内。

小林「君、名前は？」

錬太郎「余田錬太郎です」

小林「あぁ、体験の。空いてる席座って」

錬太郎、すっと空いてる席に座る。

無愛想な錬太郎に少しイラッとした表情になる小林。

〇コンビニ・駐車場・車内（夜）

助手席の優来。

おにぎりや飲み物を買って運転席に乗り込む宇田川謙信（２０）。

優来「ごめん、迎えにきてもらって」

謙信「いえ、早めに解決してよかったです。それにしても人手不足深刻ですね。僕たちの班、本当は来週から稼働なのに」

優来におにぎりを渡す謙信。

優来「ありがとう」

おにぎりを受け取る優来。

優来「ん？」

優来、ふと窓の外を見ると三階建ての雑居ビルの外階段に、光る眼のようなものを見つける。

優来「謙信君、あれ……」

○翔洋塾・建物外（夜）

建物から出てくる錬太郎。

錬太郎がスマホを確認すると母から『買い物したいから塾終わったら商店街に来て～』とメッセージ。

面倒そうに頭を掻く錬太郎。

○雑居ビル前（夜）

外階段から黒い狼のような大きな犬が飛び出し、道路に着地する。

通行人たちが悲鳴を上げる。